

明治学院歴史資料館 ニュースレター No.10

明治学院歴史資料館発行

目次

- ・ヘボン博士の気象観測が現代によみがえる
- ・和英語林集成刊行150年記念トークイベント
「日本語の辞書はなぜ二つあるのか」
- ・第19回図書館総合展 講演
「貴重書を使つての図書館・資料館での教育」
- ・歴史資料館2017年度下半期・2018年度上半期活動報告
- ・寄贈資料・資料集・書籍案内
- ・明治学院歴史資料館資料集第13・14集刊行案内



ヘボン博士の気象観測が現代によみがえる

ヘボン博士はコロンビア大学の委嘱を受けた米国気象学会の会員であり、観測機器を持参して、来日の翌月1859（安政6）年11月から10年以上気象観測を続けた。日の出時と午後2時の気温と雨量を計測し、晴・曇・雨の日数、月別の最高最低気温、平均気温の観測表を作成し、1874（明治7）年6月17日に「THE ASIATIC SOCIETY OF JAPAN」（日本アジア協会）の機関誌で「気象観測表」と題する研究を掲載した。

気象の長期変動の影響が深刻化している現在では、長期的な観測記録の考察は重大な課題であり、将来予測のためには過去の記録との比較が極めて重要である。しかし、日本での公式気象観測開始は1872年の函館気候測量所に始まるものしかない。ヘボン博士の観測は1860年代のものであり、毎日の観測により雨量まで記録された科学的データである。幕末は天候不順で天災が多く、これが幕府崩壊に影響したとも言われるが、これを裏付ける貴重なデータである。

今回、博士のデータを使用した論文「ヘボンの気象観測記録からみた横浜における1863-1869年の降水量変動(*)」が『地学雑誌』発表された。これは全国に残された古日記に記載された天候記録とヘボン博士の横浜での観測を比較し、1867（慶應3）年が干ばつのある少雨の年であり、1868年には夏が多雨で全国的に長雨による水害を起こした年であると実証した研究である。

*平野淳平・三上岳彦・財城真寿美・仁科淳司

“Analysis of Precipitation Data at Yokohama, Japan, from 1863 to 1869 Observed by J.C. Hepburn” 東京地学協会『地学雑誌』2018 Vol.127 No.4

なお、ヘボン博士の気象観測データは、英軍の補給の資料として英国国会に報告する際にも使用された。

松岡良樹（明治学院歴史資料館研究調査員）

■開催概要■

明治学院歴史資料館主催

和英語林集成刊行150年記念

トークイベント

2017年11月3日(金・祝) 14:30~15:00

明治学院記念館 小チャペル

【講演者】

松岡良樹 明治学院歴史資料館研究調査員

日本語の辞書はなぜ二つあるのか

日本語には日本語(国語)辞書と漢和辞書がある。なぜだろうか。

言葉は基本的に「音声」であって、文字は時間(記録)と空間(地理的に離れた相手)を超えたコミュニケーションのために発明・利用された。

日本は文字がなく、中国から漢字、漢語(中国語の単語)が伝わる。漢字を利用した万葉仮名に始まり、片仮名と平仮名が創出された。

辞書は、言葉を文字にして広く間違いなく通達し、理解のために編纂されるが、特に全国的に大規模なコミュニケーションの必要がでてくる室町時代から江戸時代に発展してきた。

「国語辞書」の前身となる「節用集」は室町時代に始まり江戸期に刷部数最大となり、昭和初期まで利用された日本語を漢字で表現するための「字引」である。「漢和辞書」は中国語と日本語との辞書ではなく、日本語で使われる「漢語」の辞書であり、漢語の意味と理解のための辞書である。

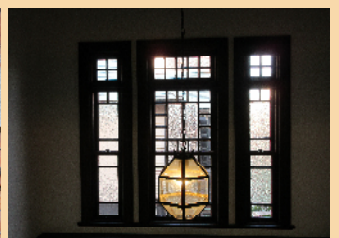
安土桃山時代の外国人との本格的な出会いによっ

て、日本語をポルトガル語で解説した『日葡辞書』が成立する。さらに江戸時代には和蘭語辞書『ハルマ和解』などができたが、日本語—和蘭語の本格的編集までには至らなかった。

幕末・明治になると、欧米との本格的な交流が始まり、近代的な西洋言語学に基づく日本語理解のため辞書が編まれた。英語ではJ. C. ヘボンの『和英語林集成』が、仏語はL. パジェスやM. カシオン、独語はR. レーマンらが辞書を編纂する。なかでも近代日本語辞書の最高峰『和英語林集成』は、N. ウェブスターの辞書をモデルに編纂され、辞書の命である見出し語の選定が素晴らしく、明治29年の『和英大辞典』(F. ブリンクリー)まで比肩する辞書が発行されなかった。いまま近代日本語研究に必須である。

現代に生きる『和英語林集成』の遺産として次のようなものを挙げるができる。

- ①日本語の第四の表記としていまでも使われる「ヘボン式ローマ字」で記されている。
- ②日本語辞書の祖として、近代的国語辞書『言海』などの辞書へ強い影響を与えた。
- ③最初の和独辞書も『和英語林集成』の独訳である。



■開催概要■

株式会社大入・明治学院歴史資料館共催

第19回図書館総合展 講演

2017年11月9日(木) 10:00~11:30

パシフィコ横浜

【講演者】

品川晃二 株式会社大入

松岡良樹 明治学院歴史資料館研究調査員

貴重書を使っ

の図書館・資料館での教育

(株式会社大入 品川晃二様に続いて、明治学院歴史資料館研究調査員の松岡良樹が講演を行った。)

図書館や資料館は本や資料の「倉庫」ではなく、「文化の維持と発展をめざす教育の場」であるという立場から講演は企画された。また貴重書はその学校のやって来たこと、やりたかったことが反映され、学校の特長があらわれる。

明治学院は英学の学校として、宣教師たちの残した「幕末・明治期の辞書」や「日本語研究書」、「和訳聖書」、「幕末や明治の英会話書」などを所蔵するとともに、19世紀20世紀のヨーロッパの思潮である「旅とエグゾティスム」・「絵本とメルヘン」・「ダダとシュルレアリスム」などの書や、日本での社会事業の資料も豊富である。

明治学院では大学図書館がデジタルアーカイブスや貴重書展示会で公開し、歴史資料館は総合的な展示の中で貴重書を利用している。この動きを伝えて欲しいという要望から、講演の依頼を受けた。



<講演趣旨>

貴重書リバイバルの目標

選書は目的と意図を持って行われてきたが、10進分類により書架に拡散し見えなくなってしまった。学校の歴史と組み合わせながら、所蔵をテーマあるいはトピックとして再構成し、教育目標やその歴史的役割を示してみたい。

いままでの展示によく見られるパターン—戦略的な検討が必要な状況

- ・図書館：読書運動としてのテーマやトピックで構成した珍本展示。
- ・資料館：人物の成果中心であり、現在の課題との結びつきが弱く顕彰が多い。

明治学院の特徴を考える

- ・英学の学校：日本語研究・日本語辞書作成・教養教育
- ・キリスト教：聖書和訳に貢献、最古のプロテスタント学校
- ・社会事業に古い歴史：リハビリ・消費組合・ハンセン氏病者支援・朝日訴訟
- ・文学：島崎藤村を始めとする白金文学の歴史

感動が現在に生きる企画を一図書館

デジタルアーカイブス：自校の歴史から構成、パスファインダーでありポータルサイトの体裁に構成。

『和英語林集成』：近代日本語研究とヘボン式ローマ字／「聖書和訳」聖書和訳での明治学院の人々の活躍／「先人の輝き」該当分野での歴史的著作。

展示は、「和英語林集成—幕末明治洋学辞書展」を学内・横浜開港資料館などで開催。ミニ展示は随時。さらに貴重書閲覧会や講演会等も実施。

感動が現在に生きる企画を一歴史資料館

本の展示ではなく「事項」としてしっかり紹介していく。

「明治学院日本はじめて物語」1集・2集・3集／デジタルアーカイブスとリンクした「聖書和訳と明治学院」／「ヘボン塾の教科書」／「島崎藤村と明治学院」などを行っている。

2017年度下半期・2018年度上半期活動報告

2017年

10月 ニュースレターNo. 9刊行

全国大学史資料協議会2017年度総会ならびに全国研究会参加(於：愛知大学)(10月11日～13日)

第6回 学園アーカイブズセミナー「著作権法と学園アーカイブズ」参加(10月24日)

企画展「明治学院日本はじめて物語 社会事業編」開催

第3集は社会事業をテーマに明治学院に縁のあるはじめての出来事の特集。

地下倉庫所蔵目録整備作業

臨時開館(創立記念礼拝・校友のつどい 10月28日)

11月 東京文化財ウィーク(11月1日～3日)

期間中、約1,700名にご来場いただきました。

この期間のみ一般公開される記念館2階大会議室に休憩スペースを用意し、当館で刊行されている資料を設置。ゆっくり閲覧していただきました。

「和英語林集成刊行150年記念トークイベント」開催(11月3日)

松岡良樹研究調査員による和英語林集成をテーマにしたトークイベントを開催。

当日は実際に「明治学院大学図書館 和英語林集成デジタルアーカイブス」を操作しながら解説を行い、『和英語林集成』に初めて触れる方にもわかりやすい内容でした。

第19回 図書館総合展フォーラム参加(11月8日、9日)

「貴重資料を使つての図書館・資料館での教育」と題し、株式会社大入様と共催でフォーラムを行いました。

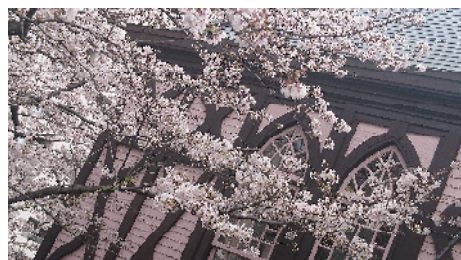
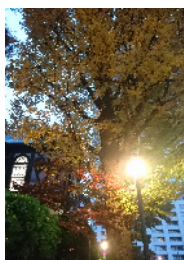
所蔵資料のデジタル化が進み、図書館や資料館では次にどのように活かすかということが課題に挙げられます。そこで、明治学院の大学図書館や歴史資料館での取り組み例を、松岡良樹研究調査員が紹介しました。当日は大学図書館の方など、同じような現状を抱く、多くの皆様に参加していただき、盛況なフォーラムとなりました。

明治学院高等学校事務長研修協力(11月14日)

第2回 歴史資料館委員会開催(11月22日)

地下倉庫所蔵目録整備作業

臨時開館(東京文化財ウィーク 11月1日～3日)



- 12月 全国大学史資料協議会東日本部会研究会参加(於：清泉女子大学)(12月1日)
 学習院アーカイブス講演会「学習院アーカイブズの効用」参加(12月5日)
 横浜外国人墓地調査(12月12日)
 地下倉庫所蔵目録整備作業

2018年

- 1月 第3回 歴史資料館委員会開催(1月24日)
 地下倉庫所蔵目録整備作業
 2月 山武市歴史民俗資料館調査出張(2月22日)
 地下倉庫所蔵目録整備作業

【2017年度 統計】

資料提供・レファレンス件数 93件
 展示室総来館者数(概算) 6,600人
 ※2017年7月21日～9月20日：
 展示室閉館・レファレンス休止

今年度の所蔵資料目録整備作業は約2,760件行いました。

- 3月 明治学院歴史資料館資料集第13集『明治学院の外国人宣教師－瀬川和雄遺稿集－』刊行

監修者解説(P.7)

明治学院歴史資料館資料集第14集『大正期の明治学院とその周辺』刊行 訳者解説(P.8)

明治学院高等学校・明治学院大学卒業式(3月10日、19日、20日)来館者約100名

大学白金校舎オープンキャンパス展示パネル貸出

臨時開館(白金校舎オープンキャンパス 3月24日)来館者約170名

2018年3月31日付 播本秀史館長退任 後任に長谷川一館長



- 4月 明治学院高等学校・明治学院大学入学式(4月2日、3日、6日) 来館者約370名

明治学院新人職員研修協力(4月6日)

明治学院高等学校新1年生フィールドワーク協力(4月16日～27日)

歴史資料館展示室を見学し、自分が感銘を受けたテーマを選ぶ課題の実施協力

- 5月 歴史資料館展示室 寄贈コーナー一部展示替え

全国大学史資料協議会東日本部会2018年度総会出席(於：國學院大学)(5月31日)

- 6月 第1回 歴史資料館委員会開催(6月27日)

臨時開館(キリスト教学校教育同盟加盟校高校教員説明会・大学保証人総会 6月2日)

- 7月 文学部芸術学科授業協力(7月9日)

昨年に引き続き「視聴覚教育メディア論A」担当、三河内彰子先生の学芸員課程授業の協力

歴史的建造物の見学と説明、関連資料をもとに、展示室見学とその開設経緯を説明

- 8月 第110回全国大学史資料協議会東日本部会研究会(於：東京藝術大学)(8月2日)

大学白金校舎オープンキャンパス展示パネル貸出

臨時開館(白金校舎オープンキャンパス 8月24日、25日)来館者約1,170名

- 9月 明治学院中学1年生 白金キャンパス見学(9月11日)

寄贈資料紹介

ご寄贈いただきました資料を一部ご紹介いたします。

■「チャペル週報 招き」

2017年9月、大学宗教部より「チャペル週報 招き」の創刊号から1000号までが、歴史資料館に移管されました。今回移管された「チャペル週報 招き」は1967年から毎週発行され、日々行われているチャペルアワー（大学礼拝）を学生、教職員に周知するために、50年以上にわたって配布されているものです。その週のチャペルアワーの奨励者や聖書箇所等を掲載しています。

過去の号を紐解いてみると、手書きのものから活字への移り変わりをかいまみることができ、今回、歴史資料館においてデジタル化を行い、データでも閲覧可能となりました。

■120周年記念品

2018年5月に司馬純詩名誉教授（元国際学部教授）より、120周年記念品を多数ご寄贈いただきました。記念品は、スタジアムジャンパー、スタッフブルゾン、ポロシャツ、マグカップ、バインダー、タオル、ガラスの文鎮、カセットテープ、シャープペンシル、ボールペン、CD、フライヤー、などがあり、大切に保管しております。



寄贈資料の一部をご紹介いたします。ご寄贈いただきました方々へ深く感謝申し上げます。

- 生島美紀子様『天才作曲家 大澤壽人 駆け巡るボストン・パリ・日本』
- 大塩 武 様 MGUブランディング関連資料
- 木村 一 様『図説 近代日本の辞書』
- 小林 恵子様『松野クララを偲んで』
- 学院長室 チャペルコンサートシリーズ・明治学院礼拝堂献堂100周年
記念音楽礼拝 フライヤー・パンフレット類等
- 法人事務局 テネシー明治学院関連資料 他
- 大学宗教部 チャペル週報 1号～1000号(1950年～2005年)、
横浜校舎オルガン奉献式写真
- 他大学・学校・資料館・博物館より 資料集・ニュースレター・年史類

寄贈のお願い

明治学院歴史資料館では
本学院の歴史に関する資料を
収集しております。
皆様のお手元に資料や
情報がございましたら
ご連絡ください。
宜しく願いいたします。

明治学院歴史資料館資料集第13集

明治学院の外国人宣教師－瀬川和雄遺稿集－

これは瀬川和雄牧師の遺稿から再構成した資料集です。資料集第10集として企画されましたが、瀬川氏は2015年6月に逝去され、段ボール箱の原稿とワープロのフロッピーディスクが残されました。打ち合わせ過程からほぼ最終原稿と考えられるものを、フロッピーディスクから選択再現してこの資料集としました。瀬川氏の資料作成方法としては、日本での記録から宣教師を抜き出し名簿を作成・構成し、それに解説をつけているため、教団から離れた自費宣教師も記載されています。

第一章を宣教師論、第二章を教派別の明治学院教師及び関連校宣教師とし、第三章を明治学院と宣教師資料として構成し、人名索引のなかった『明治学院沿革略』・『明治学院五十年史』・『明治学院八十年史』の人名索引もつけました。

瀬川資料としては他にも、宣教師年度別名簿／宣教師・学校・明治学院／長老派・改革派・北英国一致長老派・カンバーランド派・ドイツ改革派／各学校別宣教師名簿などがあり、ほぼ完成した原稿として当館で所蔵されることになりました。

明治学院の宣教師たちの全容と動向がわかる初めての資料集であり、宣教師の人々が見え易くなっていくと思います。

松岡良樹（明治学院歴史資料館研究調査員）

書籍案内

『聖書を読んだ30人

～夏目漱石から山本五十六まで～』

鈴木範久 著

一般財団法人日本聖書協会

2017年5月刊行



『横浜の女性宣教師たち

～開港から戦後復興の足跡～』

横浜プロテスタント史研究会編

岡部一興

齋藤元子 ほか著

株式会社有隣堂

2018年3月刊行



企画展「明治学院はじめて物語 社会事業編」開催中

第3弾では社会事業をテーマとし、明治学院創成期から現代にかけて日本ではじめての出来事を紹介。

明治学院はじめて物語 社会事業編

- ・身体障害者援護事業とリハビリテーションのはじめて
- ・ハンセン病患者の生活施設 一目黒「慰廃園」
- ・口語法豊話学校とライシャワー夫妻
- ・社会的ボランティアの初めて 一賀川豊彦と明治学院学生
- ・精神病者福祉のパイオニア 一谷中輝雄と「やどかりの里」
- ・雪国のはじめての盲学校 一大森隆碩
- ・日本初の盲人用特殊教育教科書は「聖書」
- ・日本初の生存権裁判 一「朝日訴訟」と天達忠雄教授



大正期の明治学院とその周辺 —ホフソンマー宣教師の書簡より—

明治学院歴史資料館資料集第14集として刊行された本書は、米国オランダ改革教会海外伝道局発行の月刊機関誌 *The Mission Field* に掲載された明治学院教師ホフソンマー宣教師 (Walter Edward Hoffsommer) の報告書簡を翻訳したものである。

ホフソンマーは、大正期の明治学院を支えた宣教師の一人であった。だが、残念なことに、学院史には、彼の活動に関しては詳しく記されていない。

ホフソンマーは、1880年8月1日米国カンザス州に生まれ、8歳の時、一家でペンシルベニア州に転居する。1903年同州にあるアーサイナス・カレッジ (Ursinus College) を卒業し、YMCAで書記の職に就く。1907年7月31日、ミス・グレース・ポーズジー (Grace Posey) と結婚。結婚式の数週間後、若いカップルは、米国オランダ改革教会海外伝道局の任命により、日本へと旅立つ。

赴任地は東京の明治学院であった。1915年までの8年間、宣教師かつ教師として活動する。ホフソンマーは、朝鮮半島からの留学生に対して、学費の支援や住まいの提供など、親身な世話をしていた。また、留学生も事あるごとにホフソンマーに助言を求めていたことが、留学生の手記に綴られている。

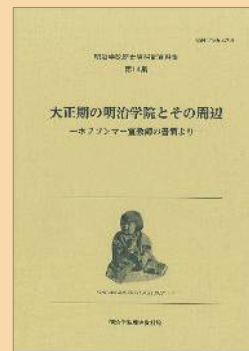
1919年、アメリカン・スクール・イン・ジャパンの理事らによる緊急の要請を受けて、同校の校長職に就くこととなり、明治学院を去る。ホフソンマーは校長就任後わずか3年間で、運営に悪戦苦闘する小さなアメリカン・スクールを欧米の有名校に劣らないほどハイレベルな教育機関へと押し上げた。ホフソンマーは、他のアジアの国々にあるアメリカン・スクールが、日本で彼が手がけたような改革を試みることに對してサポートを惜しまなかった。その目的の一環として、ホフソンマーは1922年12月北京と上海を訪れた。会議に出席し、講演をするなど多忙な滞在の疲労からか、12月22日夜、当地で急死する。42歳の若さであった。亡骸は東京に運ばれ、明治学院に程近い白金の瑞聖寺に埋葬されて、J.C. バラやワイコフら宣教師と共に眠っている。

本書で訳出した8通の書簡は、ホフソンマーが1912 (大正1) 年から1914 (大正3) 年に米国オランダ改革教会海外伝道局の月刊機関誌 *The Mission Field* に送付したものである。書簡からは、ホフソンマーと明治学院生との深い交わりが生き生きと伝わってくる。

ホフソンマーは、英文学、歴史、修辞学など複数の授業を受け持っていたが、生徒たちとの交流は教室内にとどまらず、しばしば一緒に遠足や小旅行に出かけていた。また、バイブル・クラスや日曜学校に生徒たちを誘い、伝道活動にも熱心であったことがわかる。

1919年のアメリカン・スクールへの突然の転職、そして、1922年の急逝により、これまでホフソンマーと明治学院との関わりは十分に明らかにされてこなかった。本書がその一助となれば、幸いである。

訳者：齋藤元子 (元明治学院歴史資料館研究調査員)



2018年3月刊行

明治学院歴史資料館 ニュースレターNo. 10

発行者 明治学院 歴史資料館

発行日 2018年12月1日

電話 03-5421-5170

〒108-8636

東京都港区白金台1-2-37

E-mail

shiryokan@mgquad.meijigakuin.ac.jp

ホームページ

http://shiryokan.meijigakuin.jp/

2018年度 歴史資料館委員・スタッフ

【明治学院歴史資料館委員会】

委員長 長谷川 一 歴史資料館館長(文学部教授)

委員 小川 文昭 図書館長(経済学部教授) 青木 剛 (文学部教授 2018年11月逝去)

清水 浩一 (社会学部教授) 植木 献 (教養教育センター准教授)

秋山 智一郎 (法人事務局長) 鈴木 直子 (図書館次長)

岡村 淑美 (明治学院高等学校教諭) 青野 由美 (明治学院東村山高等学校教諭)

【歴史資料館】

研究員 鈴木 範久 辻 直人 木村 一

研究調査員 松岡 良樹 石崎 康子

事務局 安藤 正明 桑折 美智代 事務スタッフ 岩田 有紀子